

研究結果報告書

本研究は20世紀前半期に朝鮮半島において刊行された短歌、俳句、川柳のような日本の短詩型の古典詩歌に関する文献を対象にし、朝鮮人作家たちの作品を考察したものである。韓国では、植民地時代における「二重言語文学」という視座で、朝鮮人作家の日本語文学の研究が盛んに行われてきたが、固有の伝統的な創作方法を要する日本の古典詩歌ジャンルにかかわった朝鮮人作家に関してはほとんど論じられていない。

しかし、すでに日韓合併が行われる前から1910年代にかけて、朝鮮半島で俳句・川柳・短歌が創作されはじめ、在朝日本人と朝鮮人がお互いの言語と文化を学習し探索しながら、習作を試みた時代として、植民地文学のハイブリッド性を現している。それから1920年代からは、日本から渡ってきた有力歌人や俳人によって専門的な文学雑誌とともに歌集と句集も盛んに刊行され、1930年代に入ったら、朝鮮半島の各地で流派ごと競合的な活動を見せたり「内地」日本の歌壇や俳壇に逆に影響を及ぼすほど成長した。やがて1930年代後半からは戦争の拡散にしたがい、俳句ではなお日常に対する叙情的な視覚を保とうとする傾向が強いが、短歌の方では段々国策文学の道を進む詩歌界に動かされ、時局に積極的に賛同する作品が多数現われる。

本研究ではこのような朝鮮半島という「外地」で創作された日本古典詩歌の有り様を通し、このジャンルと朝鮮人作家との関わり方、「内地」日本の文壇との関係、朝鮮人が創作した日本古典詩歌の特徴などを考察した。朝鮮人作家の「二重言語文学」は小説や現代詩のみならず、短歌、俳句、川柳のようなジャンルでもかなり早い時期から広い範囲において存在し、日本の主流の文壇と連携しながら、植民地的なハイブリッド性、被植民地における知識人としての軌跡、朝鮮の郷土色、戦争に便乗した国策文学的な面貌を呈していることが、実作の分析を通して捉えられた。これにより未だに「二重言語文学」で取り扱われなかった新たな領域を開拓することで、植民地時代の朝鮮人作家の日本語文学の幅を広げ、「外地日本語文学」の実態を把握することの一助になったと思われる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名 : 「朝鮮半島における日本伝統詩歌の展開—短歌・俳句・川柳関連の文献を中心として」

発表者 : 巖仁卿

会議名 : 植民地日本語文学・文化研究会の定期発表会

日時 : 2013年3月29日18時

場所 : 高麗大学校日本研究センター304号

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名 : 「植民地朝鮮の日本古典詩歌ジャンルと朝鮮人作家—短歌・俳句・川柳を中心として」

発表者 : 巖仁卿

論文掲載誌 : 『民族文化論叢』第53輯

掲載時期 : 2013年4月30日

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)